

続・保育の中の小さなこと大切なこと ⑤ 守 永 英 子

年長組も、秋になると、過ぎていく一つ一つの行事が、幼稚園生活の終りを、しみじみと思わせる。

子どもたちにも、何かしら、そのような思いがあるのであろうか。秋も終る頃、T子が私のそばに寄ってきて、問いかけた。

「私たちが小学校へ行くとき、今、ひきだしに入れてあるノートや、クレヨンや、はさみは、おうちに持って帰るの？」

「そう、持って帰るのよ。」私は、少し感傷的な気分になって、答えた。が、次に続いたT子の言葉に、しみじみとした気持は、一瞬にして吹き飛んだ。

「池の組（年中組）が、大きい組にきて、私たちのノートがはいっているよ、邪魔だから？」

私は、驚いて、言葉に詰まった。何ということであろう。私の中には、こういう発想は、全くなかった。子どもの自由画帳は、その子どもの成長の姿として、又、思い出になるも

のとして、子どもの手許に残してあげたいものと思つていた。

しかし、T子の言うように、前の人のノートが、ひきだしに残っているのは、次の人が困る、というのも、一つの理屈ではある。

私は、白けた気持を押えて、できるだけ穏やかに答えた。

「あなたがかけた絵は、あなたの大事なものだから、おうちに持って帰るのよ。大きくなってから、小さいとき、こんな絵をかいたのかなあ」って、見られるでしょう。」

「ふうん」 T子の反応は、なるほどというように、素直であった。

私は、ほっと胸をなでおろした。が、それも、つかの間であった。

T子は、教卓に置いてあった、一冊の自由画帳に、目を止めた。

「このノートは誰の？」

「K子ちゃんのもの」

「どうして、ここに置いてあるの？」

「全部かいてしまったから、新しいのをちょうだいって」

「どうれ、見せて」

T子は、K子の自由面帳を、バラバラとめくり、まだかいていない、白いページを見つけた。

「まだ、かいてないところあるじゃない。早く、新しいノートをもらいたくて、ごまかそうと思ったんじゃない？」

驚きと、情なさが、一度に、私の胸の中にひろがった。私は、重い気持ちに堪えながら答えた。

「きっと、全部かいたって、思い違いしたのね。」

T子は、それ以上、そのことにこだわる様子もなく、子どもたちの遊びに、はいつて行った。

T子にとっては、何気ない、軽い会話といった調子であったが、受けとめた私にとっては、何とも、気の重くなる会話であった。

このクラスは、私の二十数年の経験の中で、最もけんかの多いクラスのように思える。特に、女の子たちの、激しい口

調の言い争いは、私の心を滅入らせた。そして、最近はいぶん穏やかになってきたと思われるもののその渦中に、T子がいることが、多かったのである。

そのことの意味を、この会話は、私に、新しい側面を見せて、気付かせてくれた。今まで、子どもたちのけんかの多くは、気持の表現のつたなさから、起ってくるものと思っていたし、事実、そこに、指導の焦点を置くことで、ずいぶん子ども同志の関係を、よくすることが出来たと思う。

しかし、T子の場合、それは、表現の問題ではなく、周囲の出来事の、見え方の問題である。性格が強く、口も達者なT子のまわりに、「Tちゃんに、いじめられた」という訴えの多かったのも、なるほどどうなずける。

生後六年、どのような仕組で、このような見方が、作られてきたのであろうか。このような見方が、変るためには、何を手がかりに、どのように、働きかければよいのだろうか。卒業までの三か月間に、私に出来ることは、何であろうか。私は、すっかり頭をかかえてしまったのである。

保育とは、むずかしいものだと、改めて、しみじみ思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)